

あ の 日

村 川 勝 彦 (有川町東浦小学校)

「勝彦、ちょっと来て」

母のその一言から、私にとっての「長崎大水害」が始まった。

あの日、私は、鳴滝の自宅であと数日に迫った教員採用試験の勉強をしていた。母の声が聞え、居間の窓から外を見ると、家の前を流れる川の水位が、3分の2程の高さになっていた。

「川、あふれないかしら」

「だいじょうぶ、じきやむよ」

と答えた私だったが、雨足は強まり、水位はどんどん上昇していった。そして、30分もしないうちに、水は暗きよからあふれ、壁にぶつかり逆流し、向う岸の家へとおそいかかっていた。その頃には、一階に住んでいる人たちが二階の私の家に避難してきており、家の中は騒然としたものだった。電気も停まり、ローソクの灯、激しい雨音、すべてが現実のものと思えなかった。

9時半ごろには、完全に道と川との区別もつかなくなり、向う岸の家の階下は、流水や流木のために、めちゃくちゃになっていた。こちらから、声をかけても返事もなく、みんなで心配していた。後日、聞いた話では、向う岸の家の人は、二階の窓から隣の家に避難して無事だったということだった。

その頃、父や一階の男の人達は、雨の中を外に出て、車が流されないように、ロープで門柱に固定していた。その時、一人の男の子が、へいを伝って(伝うというよりぶらさがって)、道を下ってきた。父が

「何をしているんだ」

と、大声で問いかけると、

「家に帰るところです」

と答えがかえってきた。

「馬鹿、こんな雨の中を帰れるわけがあるもんか。うちに泊りなさい」

しばらく考えていたその子も、結局私の家に泊まることになった。話を聞くと、長崎南高校の生徒で、家は田上のほうだということだった。電話をかけてみると、どうしてこのくらいの雨で家に帰れないのか不思議だという返事がかえってきた。説明しても、鳴滝とその子の家の一带との状況が余りにも違いすぎて、説明のしようがないので、とにかく私の家に泊めるということで電話を切った。

それから後も電気がつかず、家の中はたくさんの人でいっぱいという状況でなにも出来ず、なさないやら、くやしいやらという気持ちで、川の水位や雨にとらめっこをしていた。何もできないままだ待っただけ、あんなに長い夜は、私の短い人生の中でもはじめてのものだった。

次の日は、友人からの

「おい、生きてるか」

の第一声ではじまる。見舞の電話や、前の夜に泊めた高校生の親からのお礼の電話などの応対にいそがしかった。

長崎大水害、それは多くの人命を奪い、町にも多くの爪痕を残す大災害であった。しかし、災害後の長崎っ子の逞しいたちなおりや、その中での人々の心の温まる助け合いなど多くのことを、私に教えてくれた。これから後、私たちがしなければならぬことは、後世まであの日のことを語り伝えることだと思う。

最後に、水害によって失われた299人の方々のご冥福を祈りたいと思います。